

海の記憶 稲毛の思い出



浅間神社鳥居前での紙芝居

神谷別荘の前が海だったことはご存知ですね。昭和36年頃から埋め立てが始まります。今回は、まだ稲毛が海辺の町だった頃に少年少女だった皆さんから楽しいお話を聞きし、その一部をまとめてみました。

左の写真は、昭和31~2年の浅間神社です。**あそび**紙芝居に見入っているのは、今回お話しいただいた皆さんと同世代のよう、日本中子どもが溢れていた時代です。

さて、紙芝居が終わると次の遊び場は海です。海にはアサリがいっぱい、海苔の養殖も盛んでした。「あの辺に魚が隠れている」とか、「この魚は食べられるぞ」とか、そんな野性の感覚を体験できるのが浜の遊びでした。

今では、稲毛のお祭りとして定着した「よとぼし」もそんな浜での夜の遊びです。そもそも「よとぼし」とは、夜の海で、灯りをつけて魚をおびき寄せる漁のことです。

当時は、灯りにカーバイド(以前はカンテラ)を使っていましたが、大人はそれが面倒くさくて、車のバッテリーから電源をとった小さな電球をヨーグルトの瓶に入れてランプにしました。それを海の中に入ると、パッと海中が明るくなり、魚がよく獲れたそうです。主にハゼやカレイですが、たまにはエビもゲットしたとか。

遊び疲れて喉が渇くと、海辺に湧いていた真水を飲みます。この水は海苔の養殖のために掘った井戸で、自噴していましたが、潮が満ちると使えないのが欠点でした。

海気通信

8号

2015/11/1

発行

千葉市民ギャラリーいながげ 263-0034
千葉市稲毛区稲毛 1-8-35
TEL: 043-248-8723
FAX: 043-242-0729
<http://business4.plala.or.jp/g-inage/>

おやつ

草野水路はひざ下くらい深さで、それはきれいな水の流れて、魚もたくさんいたそうです。学校の授業に飽きてだらけてくると、先生が水路に連れて行ってくれます。フナなどをとって学校に戻って焼いて食べた思い出があります(なんともうらやましいですねえ)。

稲毛らしいおやつと言えば、ワタリガニです。この辺で獲れたので3時のおやつによく出ました。時々シャコも食べました。

たくさんワタリガニを箱に入れて、親戚の家へ持って行く途中、はっと気づいたら箱の中が空っぽ、どうやら狐に持って行かれた、という話も残っています。豊かな海が身近かにあってこそ「おやつ」の思い出です。

稲毛八余景
稲村三伯は江戸時代に、蘭日辞書「ハルマ和辭」(1796年)を完成させた蘭方医です。その三伯が海上随鳴(つなみすい)と名前を変えて、1802年から5年ほど稲毛に住んでいたのですが、その後妻子を稲毛に残してひとり京都に行ってしまう。あゝ残された妻子は？
稲毛の旧家に残されていた文書によると、三伯の美子で医師の海上元厚(三伯)の医師を呼んだとあります(市立郷土博発行「千葉いまむかしNo.27」)。そうすると、三伯の子でもある元厚は五十歳くらいまで稲毛で医者として生活していたこととなります。

※カーバイドは炭化カルシウムを使った簡単な照明で昔は屋台などで使われていました。

いなげスクープ よし子さ〜ん! 林家三平は来ましたか?

「よし子さ〜ん」のギャグで国民的な人気があった落語家、先代の林家三平師匠が稲毛海岸に来たらしいのです。ご記憶のある方は、ぜひ詳しいお話しをお聞かせください。



演芸台前の賑わい (昭和30年代前半)

もし本当に来たとして、「いったいどこで落語?」「まさか海の中で?」・・・実は、砂浜に「演芸台」があったので、そこで囃を一席うったと思います。だから満潮時には海の中、うっかり海で「よし子さ〜ん」と叫んだことは、さすがになかったでしょうけれど。

ところで、この「演芸台」は、周りをよしずで囲った簡単なもので、納涼台(稲毛海岸特有の立派な海の家)を経営する人たちがお金を出し合って興業していたようです。当時有名な歌手や芸能人も来て大賑わいだったとか。上の写真は、ギターを伴奏に女性が歌っているように見えます。プロの歌手なのか素人ののど自慢なのかはわかりませんが、日ざしの強い中、大勢の観客が楽しんでいましたね。



演芸台の裏側?

一方、左の写真はよしずをめぐるした演芸台の裏側かと思われます。舞台の下に人が大勢います。前の方に割り込めなかったのか、ただ日ざしを避けているだけなのかよくわかりませんが、子どもの服装をはじめ当時の雰囲気がよく伝わる興味深い写真です。

稲村三伯と海上元厚

昔の面影残す稲毛の町→



一方、元厚を継いだ周庵は、同じく海上元厚と名乗り、1893年(明治26年)まで稲毛の医療を担っていました。1899年と云えば稲毛海気療養所(後の海気館)ができて5年後のことです。海気療養所を開設した浜野昇は東京医学校(後の東大卒)の近代的なお医者さん、一方、周庵(元厚)は江戸時代からの蘭方医です。二人はこの土地で重なります。

江戸の記憶が薄れたころ、稲毛の町は、海水浴場の海気館でいっしょに新しい時代に突入していきます。その傍らで少しずつ忘れられていった稲村三伯その実子の海上元厚、そして江戸から来た周庵(元厚)の足跡をなんとかたどってみたいと思いました。
本号は、花見川区の本木幸正様からお借りした三枚の写真と、七月十一日の「いなげお話し会」での内容をもとに編集しました。お話しいただいた皆様、そして本木様本当にありがとうございました。